

Title	利他行動の促進・抑制過程:評判への関心に基づく検討(Abstract_要旨)
Author(s)	河村, 悠太
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2019-03-25
URL	https://doi.org/10.14989/doctor.k21499
Right	学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要約は2019-12-01に公開; 許諾条件により要旨は2019-03-26に公開
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

(続紙 1)

京都大学	博士（教育学）	氏名	河村悠太
論文題目	利他行動の促進・抑制過程：評判への関心に基づく検討		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、利他行動の促進・抑制過程に及ぼす評判への関心の影響について、心理学実験と調査にもとづいて検討した社会心理学研究である。論文は 6 章、7 つの研究から構成されている。</p> <p>第 1 章「本論文の目的と理論的背景」では、利他行動の定義を述べた後、利他的な振る舞いの進化を説明する先行研究の代表的な理論を概観している。特に、血縁関係や直接的な互惠関係のない他者に対する利他行動の進化を説明する際に、評判が重要であるとしている。また、評判が利他行動の進化に寄与することと、行為者が評判を気にして利他的に振る舞うことは理論的に異なることを指摘している。そして、心理的要因としての評判への関心と利他行動の関連について、先行研究の知見が一貫しないことを述べ、その関連を検討することが本論文の課題であるとしている。</p> <p>第 2 章「評判への関心と利他行動の関連」では、まず評判への関心を 2 つに区分できることを論じている。そして、研究 1 では、市民 416 人によるオンライン調査を行い、2 つの評判への関心の特性的個人差と、利他行動を取る頻度の関連を調べている。その結果、賞賛獲得は利他行動と正に関連し、その関係は対象との社会的距離が遠くなるほど強くなっているとしている。一方拒否回避は他人への利他行動と負に関連しており、これは他人への利他行動が規範的ではないためという可能性を指摘している。そして、評判への関心と利他行動の間の関連は、良い評判への接近的動機・志向性である賞賛獲得と、悪い評判に対する回避的動機・志向性である拒否回避ごとに異なることを示唆している。</p> <p>第 3 章「評判への関心と利他行動の関連に対する社会的規範の調整効果」では、研究 2 において、市民 320 人を対象に、社会的規範を操作し、評判への関心と利他行動の関連が社会的規範によって変わるかをオンライン調査で調べている。その結果、拒否回避は周りが利他的に振る舞っていない非向社会的規範条件でのみ利他行動と負に関連することを明らかにしている。</p> <p>第 4 章「評判の手がかりが利他行動に及ぼす影響」では、評判手がかりとしての目の画像が利他行動に及ぼす促進効果について、先行研究の知見が一致していない点をまず指摘している。その上で、研究 3 では、評判手がかりと同時に社会的規範を操作し、評判手がかりの効果が社会的規範によって変わるかを検討している。研究 3A では、大学生 139 人による実験室実験の結果、向社会的規範の存在するときのみ、評判手がかりは利他行動を促進していた。研究 3B では市民 400 人によるオンライン実験の結果、評判手がかりは社会的規範にかかわらず利他行動に影響していなかった。以上の 2 つの研究をもとに、結果が一貫しないことの原因や現象の有無を考察している。</p> <p>第 5 章「極端な利他行動に対する評判」では、研究 4 において、社会的規範から外れた極端な利他行動に対する評判を検討している。研究 4A では市民 682 人、4B では市民 600 人を対象に実験を行い、社会的規範から外れた利他行動である全額分配行為</p>			

者への好意評価は、平等分配行為者への好意評価よりも平均的に低いことを見出している。さらに研究 4C では、日本人 416 人と米国人 400 人を対象にオンライン実験を行い、日本におけるこの関係は規範逸脱の認識に媒介されて生じること、一方、米国では見出されないことを示している。そして、米国は日本に比べて、規範逸脱に寛容であるためと考察している。

第 6 章「全体考察」では、本研究の結果と先行研究を踏まえて、評判への関心が利他行動に至るメカニズムについての理論的枠組みを提案している。そして、本論文の新規性は、心理的選好としての評判への関心に着目したときに、評判への関心が必ずしも利他行動を促進するとは限らず、評判への関心の種類や状況によっては利他行動を抑制しうることを示した点にあるとしている。さらに、利他行動を促す社会のデザインへの示唆、残された課題について論じている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、実験室とオンラインの実験、オンライン調査を用いた7つの研究を行い、評判への関心が利他行動に及ぼす影響の心理的メカニズムを考察したものである。

本論文の特色は以下の3点である。

1. 利他行動に及ぼす評判への関心に着目して、その心理的過程を実証的に解明することによって、社会心理学の利他行動研究に理論的インパクトをもつ点
2. 多様な利他行動を解明するために、オンライン調査を行うとともに、実験室とオンラインの実験における場面想定法、寄付行動、独裁者ゲームなどの課題とその日米比較を実施するなど、多角的な手法を用いて研究を行った点
3. 利他行動を促進・維持するための社会のデザインについて、実証的な基礎研究として多くの示唆をもつ点

第1章では、研究の背景として、利他行動を支える基盤として、間接互惠性を成立させるためには、評判システムが重視されていることを述べている。その上で、評判を気にする心理的選好(評判への関心)と利他行動の関連が明らかとなっていないことを指摘して、その解明を目指したところに本研究の着眼点の鋭さがある。

第2章では、綿密に設計されたオンライン調査に基づいて、2種類の評判への関心を区別し、賞賛獲得・拒否回避の傾向ごとに、社会的距離の異なる人への利他行動の頻度との関連性が異なることを見出している。これは、利他行動の自己志向的側面を捉えるための重要な出発点となる発見である。

第3章では、場面想定法により社会的規範を操作する大規模オンライン実験に基づいて、拒否回避の高い人は、周りの他者が利他的に振る舞っていない時のみ、利他行動をしない傾向があることを示している。拒否回避と利他行動の関連が社会的規範によって変わることを示した点は、利他行動研究における重要な学術的貢献である。

第4章では、評判手がかかり(目の画像)が利他行動を促進する効果が、先行研究において一貫しないことを踏まえた上で、実験室実験によって、向社会的な規範の有無が利他行動の促進を調整することを示した。さらに、オンライン実験では再現できなかったことについて、その原因をメタ分析に基づいて、多角的に検討している点は評価できる。

第5章では、規範から外れた利他行動に対して否定的評判が与えられることを、独裁者ゲームを模した3つのシナリオ実験によって検討し、(a)規範逸脱の程度が大きいほど、(b)日本では米国よりも、否定的な評判が与えられることを示している。これは、過大な利他行動への否定的評価を社会的規範逸脱の点から解明した点で、重要な学術的貢献である。

第6章「全体考察」では、一連の研究による成果に基づいて、2つの評判への関心(賞賛獲得、拒否回避)や向社会的規範の有無が利他行動を促進・抑制することについての理論的枠組みを提案している。これは、社会心理学の利他行動研究における価値ある理論的貢献である。さらに、本研究における利他行動における自己志向的側面の検討は、多くの人の利他行動を促進する社会デザインに結びつき、この研究の応用面における貢献を示すものである。

以上のように本論文は、利他行動の促進・抑制過程に及ぼす評判への関心の影響を解明するために、幅広い先行研究を踏まえた問題意識に基づき、実験と調査の研究手法を工夫した上で、データを積み重ねて考察を深め、理論的フレームワークを提起することによって、学術的に価値ある新たな成果をあげている。

今後に残された問題として以下の点が指摘できる。

- (a) 利他行動の行動指標，利他行動に及ぼす個人差特性，賞賛獲得・拒否回避の関係，利他行動による受け手の反応や長期的な影響，好意度以外の評判指標，研究 4 以外の日米比較などのさらなるデータの収集
- (b) 社会的規範の構成概念とレイヤー，その発生の起源や機能，操作方法の問題点のさらなる検討
- (c) 学生と一般社会人サンプルの差異，経営やカメラ監視社会などの社会デザインへの示唆についてのさらなる考察

しかし，こうした点は，本論文で見出された多くの新しい知見の価値を損なうものではない。

よって，本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成 31 年 1 月 30 日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。さらに，デザイン学大学院の付記部分についての試問も行った。

なお，本論文は，京都大学学位規程第 14 条第 2 項に該当するものと判断し，公表に際しては，（期間未定）当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 平成 31 年 3 月 26 日以降